

津島佑子 島の歓び



中央公論社

歓びの島 津島佑子

中央公論社



歎きの島

九五〇円

昭和五十三年三月二十五日印刷
昭和五十三年四月五日発行

著者 津島佑子

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八―七

電話(五六二)五九二二

振替東京二一三四

検印廃止
©一九七八

目次

射的	符丁	鳩	草叢	双生児	基地	水槽	水箱の土	藤蔓	飲みの島
----	----	---	----	-----	----	----	------	----	------

3	31	51	77	103	125	145	165	189	209
---	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

装
幀
佐
藤
晃
一

射
的

走り続ける列車の窓から急に上半身を乗り出して、二人の子どもが交互に金切り声を張りあげた。

見てよ、あっち、見て！

光っている。

あれが、海？

ほら、危ない。首が飛んでっちゃうから。

子どもたちの母親が両手で一人ずつの襟首をつかんで、座席に引き戻した。この声で、同じ車輦に乗り合わせていた客のうち幾人かが、腰を浮かして車窓の外を眺めやった。が、都会を出発してから三時間経ってはじめてその鈍く光る背を見せた海は、すでに、低い丘陵の蔭に隠れてしまっていた。

だって……、あれ、海だったんだろう。

二人の子どものうち、七歳の兄の方が顎を窓枠に寄せ、緑色の丘陵を睨みつけながら、不服そ

うに呟いた。母親は自分の隣に坐った四歳になる下の子どもの肩を抱いて、少しの間ためらってから答えた。

海……ね。……それより、もう、次の次の駅で降りるんだから、靴をちゃんとはいときなさい。

次の次？

下の子どもが溜息混じりに問い返した。母親は答える代りに、座席の背凭れに後頭部を預けて眼をつむった。

でも、なんだかおかしいな。お母さんが言ってた海じゃなかった。……

あ、ぼくの靴、ジュースで濡れちゃってる。

座席の下を覗きこんでいた下の子どもが泣き声を出した。

へえ、ほんとだ。でも、ちょっぴりじゃないか。もっと、濡らしてやる。

やだ、やめてよ。

どうせ、海に着いたら、濡れちゃうんだぞ。ほら、貸せよ。びしょびしょにしてやる。

いやあよ、いやだったら。

女みたいな声を出すな、ばか。

下の子どもが母親の腕にしがみついて泣きだした。

お母ちゃん、また、お兄ちゃんがぶったよう。いじわるばかり、するんだよ……。

母親は眼をつむったまま、聞えない振りをしていた。

ふと、海を思いついたのが、ゆうべだった。なぜだったろう。自分でも不思議でならない。二人の子どもを海へ連れて行こう、と思いたった。

ビスケットのかけらやプラスチック製のブロック、ジュースの空罐、下着、靴下などが散乱している部屋、流しに積まれた汚れた皿、天井からぶら下がっている洗濯物、テレビの音、下の子ども泣き声、勤め先での自分の話し声、そして、疲労、体のなかで乾ききった古いスポンジになってしまったような疲労、これらに窮屈に抱きこまれ、横たわることもできず、食卓に両肘をついて煙草を吸っていた時、青い透明な輝きが眼をかすめた。眩しく、涼しかった。薄荷のにおいのようなだった。母親は続けざまに三本、煙草を吸った。気分が悪くなり、畳の上に俯せになった。海、とその時気づいた。海しかない。すっかり、忘れていた。今まで、おかしい、おかしい、と思っていたけれど、そうか、海の部分が欠けていたのか、と思った。

上の子どもが、いつの間にか、頭の先に立っていた。

蒲団を敷くんだから、どいてよ。

母親は仕方なく立ちあがった。壁に凭れて、二人の子どもが手際よく蒲団を敷くのを眺めながら、欠けていた部分、海、青い光、波、今まで忘れていたもの……、と思い続けていた。

パジャマに着替えてから、古いウィスキーを持ちだして、水で薄め飲みはじめた。

……あした、行かなくちゃ、海へ。また、忘れてしまわないうちに。……

蒲団のなかで電車の図鑑を見ていた上の子どもが身を振って、顔だけをあげ、すでに酔いで赤らんでいる母親の顔を見つめた。口もとの引緊まった、白い子どもの顔。父親に似ている。が、子どもは父親を知らないし、父親も今の子どもを知らない。互いに互いを知らなければ、似ているという言葉も使えないのだろう。子どもは誰に似ているでもない。子どもは自分だけに執着して生きている。存在したことのない父親。でも、母親はその子どものおかげで、父親を忘れ去ることができない。去っていくこうとするそのひとを追わずに、微笑まではさすがに浮かべることができなかったが、顔をそむけずに見送ることのできた自分を誇りに感じていたものだったのだ。その頃、おなかにいた下の子どもを八ヵ月後にひとりで産んだ自分には、勇気というものがある、とうぬぼれていたものだったのに。

海だって？

下の子どもが蒲団の上に立ちあがって言った。

海って、言ったの？

そうよ……、あんたたちだって、本当の海を一度ぐらい見ておかなくちゃ……。

海かあ……、でも、あしたは学校がある。

上の子どもも起きあがってきた。

あしたは土曜日よ。……休みなさい。

だけど……、どうして行くんだ。なにかあるの？

うるさいよ、兄ちゃん。海なんだよ、海……。すごいなあ、本当に行くんだね。

……どこの海？

下の子どもが兄の頭を後から抱えて、勢いよく揺さぶった。

海だよ、兄ちゃん。ウミ！

母親は笑った。

蒼くって、いろいろな色に光って、ときには、金色に光るの。あんたの好きなネーブルのにおいもするかな。海の底のおさかなの声も聞えるかもしれない。

まさかあ……。

行ったことないくせに。

母親は子どもたちから顔をそむけた。ウィスキーの瓶が空になっていた。酔いで、体が熱くなっていた。海のおいが感じられた。が、においが強すぎて、吐き気がしてきた。いやなおい。

海に行くことが怖くなりだした。こわい。なにかを奪われ、碎かれてしまう。海ではないのかもしれない、もしかしたら。……さっきの青い透明な輝き。では、なんだったのだろう。……海。やっぱり、海。少なくとも、わたしには海しか思い合わせることができない。だったら、海へ行くしかない。勇気。こわいけれど、いや、こわいからこそ、行ってみる。つまらない勇気。でも、勇気には違いない、これだって……。

下の子どもが蒲団の上で泳ぐ真似をはじめていた。やがて、上の子どもも一緒にあって、蒲団の上を転がりだした。十一時を過ぎていた。母親は横になり、もうウィスキーはなくなってしまったので、煙草をたて続けに吸いはじめた。自分の口から出る煙に、波しぶきの白さを見ようとした。どうも、よく見えなかった。

母親が子どもの頃、海はやはり遠いものだった。デパートの屋上からも、公園の丘の上にある展望台からも、山は見えたが、海は見えなかった。はじめて海に連れていってもらったのは、八歳の時の夏休みだった。伯母の家が海辺の町にあった。母親と二人で、日帰りで行った。父親が死んで、しばらく経ってからのことだった。行きも帰りも、電車は海水浴客でいっぱいだった。デッキに新聞紙を敷いて、そこに坐りこんだ。疲労がどういふものなのか、生まれてはじめて味わいに行ったようなものだった。小学校のプールで多少泳げるようになっていたので、はじめての海でも、どうにか泳いで見せることはできた。波がこわかったが、慣れてみれば、どうという

こともなかった。砂浜で、他の子どもたちがしているように、なにが面白いのかよく分からなかったが、砂山を作ったり、瘦せた母親の体を砂に埋めてもみた。楽しかった、と聞かれて、笑顔を作って領いた。が、その日、味わったのは、やはり海ではなかった。ほんの八歳の女の子とは、海はその光にもおいても分かち合おうとはしてくれなかった。

二年後にもう一度、更に二年後に、学校から海へ行った。やはり、海はなまぬるい塩水でしかなかった。わざわざ、海へ行きたい、と思ったことはなかった。今から思えば、その頃、海の輝きを都心のプールの水面に見ていた。

では、いつ海を知ったのか。なによりも肝心なことなのに、よく思い出せない。十年前？ 五年前？ 友だちに誘われて、冬の海へ行ったこともある。一人で行ったこともある。舟に乗って、島に渡ったことさえある。でも、記憶ははっきりしない。実際には、子どもたちと同様に、まだ、本当の海など見たことがないのかもしれない。そうだとすると、たとえばピクチュア・パズルのように、小さな破片として、海が折りに触れて気紛れに体のなかに入りこんできていて、その折り折りには海と気づいていないのだが、知らないうちにひとつの形に組み合わさって、輝きを持つ海になっていた、ということだって考えられなくもない。体のなかの海。誰にも触れられたことのない海。……

酔払った母親は子どもたちの甲走った声を聞きながら、まどろみだしていた。

海の破片。……でも、その破片を嵌めこむそもその輪郭は、生まれ落ちた時味わった光の洪水からはじまっていたのだろうか。その光は痛みだった。もちろん、自分の時のことは憶えていない。子どもたちの産声を聞いた時、記憶が蘇った、と思った。わたしの時も痛くて眩しかった。それで、泣かずにいられなかった。光の洪水に一刻も早く体をなじめさせて、泣いた。でも、体がなじむより先に、光は光ではなくなってしまっていた。あれは、体のなかの海の光だったのか。わたしの母の海。

ほかにも思い出した。外国の絵本ではじめて知った人魚姫の話。あの可愛いお姫さまと、まさか自分とを重ね合わせようとしたことはなかったけれども、お姫さまの住んでいた深い海のどこかに自分も居合わせていたのではないか、と落着かない気持ちになった。人魚姫の泣き声に、海の蒼ざめた輝きを感じた。

そして、八年前。子どもたちの父親と都心の賑やかな街を歩いていた。春先で、スモッグのとりわけ濃い日だった。色とりどりのネオンがにじんで見えた。波の響きが、ふと、聞えてきた。海、とは思わなかった。波、と思った。波が迫ってくる。子どもたちの父親は咳込んでいた。風邪ではない、と言い張っていた。では、なんだったのだろう。あのひとも海のおいにむせていたのか。それで、わたしと一緒に暮らしてみよう、と心を決めてしまったのか。どこにも見えなかったから、海はどこにでも現われることができた。四方に、厚い防弾ガラスの壁のように。眼

をあげれば、青く滑らかな断面がそびえ立っている。井戸の底のような島。冷たくて、淋しい。あのひとは体温のあるものにしがみつかずにはいらなかった。そういうことだったのだろうか。でも、体のなかの海は違う。熱くて、眩しい。白く滾っている。そんな海を見たい。戻りたい。それで碎かれるものなら、碎かれてもかまわない……。

海水浴の季節ではなかったから、その土地にひとけのないのは当然だった。母親と二人の子ども、それに土地のひと二人だけが、駅で降りた。大きな観光地図が駅前の公衆便所の傍にあった。ペンキがところどころ剥げ落ちていて、黒い線で描かれた道が中断されているところもあったが、一応、この辺りの海岸の様子は呑みこめた。海水浴場が白い旗のしるしで示されていた。多過ぎで、数えきれなかった。が、今はまだ四月。母親は海岸に出られれば、それでよかった。みやげものの店もほとんど閉まっていた。道は広くて乾燥していた。駅を背に歩きだした。

家並がやがてまばらになり、雑草の生えた屑鉄置場、モーター・ボートの部品工場、ガソリン・スタンドが現われ、団地の建物を思わせる観光ホテルが前方に見えだした。母親は黙って歩き続けた。子どもたちは雑草の花を摘んだり、澄んだ水の流れるドブを覗きこんだりして、案外、機嫌よくあとを追っていた。観光ホテルの脇の小道に入ると、ようやく波の響きが耳に届いた。

同時に、においも感じられた。母親は走りだした。コンクリートの防波堤の上に出た。砂浜が拡がり、灰色にうねる海があった。吹き寄せてくる風が冷たく、母親の全身を打った。鉄の粉をまぶしたような海面。その鈍い光が眩しくて、眼の上に右手で庇を作った。砂浜には誰もいなかった。洗剤の容器、腐ったみかん、ゴム草履、古タイヤ、とゴミが目立った。こわれた回転椅子も転がっていた。母親は砂浜に降りた。子どもたちは黙りこんでいた。

波打際には更に、ビール瓶、ジュースの空罐、ビニール袋、アイス・クリームの容器、割れた皿の破片などが、海草を絡ませて連なっていた。その手前に佇み、曇り空と溶けこんで見分けのつかなくなってしまうている水平線を眺めた。鳥影も、船も見えなかった。母親は海岸線に沿って歩きだした。右手に、細長く沖に突き出た堤が見えた。その向こう側は岩場になっているらしかった。

上の子どもがはじめて口を開いた。

なんだか、くさいな……。

下の子どもが続けて言った。

きたない、犬のウンチがいっぱいある。

そう言えば、犬の足跡も多かった。

こんなところじゃないんだろ、ぼくたちの行くところは。